歴史の町　大手・市町　たんけんポイントの説明

平成 18 年 3 月版 / NPO 法人小諸町並み研究会

★たんけんマップで番号の場所をみてください。

1　大手門（約 400 才 / 1612 年頃につくられたもの）

この門は、小諸城の表玄関にあたる門で、ここから先が城の中です。この次が三の門ですから、ここは城の中心の本丸から四番目の門ということになります。
江戸時代はじめ、小諸城主の仙石秀久が、江戸から大工を招き、瓦は三河（愛知県）から取りよせてつくりました。一階は守りの堅い門、二階は書院風のおしゃれなデザインで、桃山時代のぜいたくな気風を感じさせます。
明治になって小諸藩がなくなるとともに、町の商人に買い取られました。
その後、門の部分に部屋をつくって利用したので、本来は二階立ての門ですが、今は三階となっています。そして料理屋として使われたり、一時は小諸義塾の仮教室として使われていたこともあります。
この門は、国の重要文化財に指定されており、来年から３年かけて江戸時代の門の姿にもどす工事をおこなう予定です。

2　「くらしかる浪漫館」と糸都・小諸の歴史

この建物は、大正時代に造られた繭蔵を、資料館として利用したものです。道路の向い側の小林さん（繭・製糸問屋）から小諸市に寄付されたもので、小諸のまわりの農村や、遠くは群馬県から集められた繭を、この蔵で保管していました。入口の扉まわりなどにハイカラなデザインがされ、ロマンチックな大正時代の雰囲気を感じさせます。
小諸市における器械製糸の歴史は、明治7 年にさかのぼります。荒町の豪商であった高橋平四郎が、民間資本によるものとしては県下で最初の製糸工場「丸万製糸場」を小諸町六供に創業したのが出発で、15 年に丸万が廃業後その跡地利用で八十八釜を備えた器械製糸場「浅嶽社」となっています。また明治 23 年には、小山久左エ門により、大里村の諸に 100 人取りの製糸場「純水館」が設立されました。明治の末には 10 以上の工場ができ、小諸は「糸都」と呼ばれるほど活気ある製糸の町となっています。
製糸業の繁栄とともに養蚕が盛んになり、昭和 18 年頃には小諸町の農家の半数以上が養蚕に携わっています。養蚕

収入は農家を潤すとともに商都小諸を一層繁栄させる要因の一つとなりました。この資料館１階では、蚕の生態から養蚕に関する道具や製糸・機織り、絹製品に関する資料50点余を展示しています。

3　生糸問屋・小林邸（大正初期の建物）

この家は、明治の終わりからここで生糸（絹糸）の問屋をしていた商家です。
小諸には、いち早く明治７年に製糸工場がつくられ、生糸（絹糸）の生産地として成長してきました。小諸周辺だけでなく群馬県からも繭が集められ、たくさんの女工さんが働く工場がいくつもできました。鉄道が開通すると、駅周辺に生糸の問屋や倉庫がたち、そのころこの小林家もここで商売をはじめました。むかしはここで取り引きをさかんに行っていたので、建物の玄関は道路に面して大きく開かれています。建物の前面の大きな戸や天井は本漆喰塗りで、とても立派な建物です。

4　竹内木材・油権（建物のとし94才／明治43年の建築）

明治26年に鉄道が開通して、それまでは北国街道沿いの本町、荒町が中心だった問屋が駅のまわりにもでき、大きな倉庫が並ぶようになりました。
竹内木材は、屋号を油権といい、信州のあちこちの山地の材木を買い付けて製材し、東京に出荷していました。また東京から外国の材木などを買い入れ、商売を大きくしていきました。ほかにも、北佐久郡下の学校の校舎の建設の請け負い、鉄道の枕木の製造販売などもおこなっていました。
建物はどっしりとした蔵造りで、銅板の戸袋など、細部にも丁寧な仕事が見られます。屋根には竹内木材の印の竹が入った瓦が使われています。蔵造りなので、夏は冷房が入っているくらい涼しいそうです。

5　樋の下（この通りの名前）

この通りの、線路にむかって右側の家並みの奥に、石垣が見えます。これが、江戸時代に町人地と武家地の境だった石垣です。その上に生活用水の樋が通じていたので、「樋の下」の地名がつきました。江戸時代、この通りの右側には、武士の長家が15軒並んでいました。
通りの左側は、お城を囲む城郭（土を盛って石垣で固めたもの）でした。

6　小諸城の城郭あと

小諸城は、本丸（いまの懐古園の中の池のあたり）を中心に、何重にも谷間や城郭（土を盛って石垣で固めたもの）で囲まれていました。ここは、その城郭のあとの残る貴重な場所です。

この上に登って大手門方面を見ると、門を囲む家々の美しい屋根並みが見られます。

7　小諸本陣主屋（江戸時代中期）

この建物が建てられたのは、1700 年代末から 1800 年代のはじめと言われています。

もともとは、市町の線路の横の「本陣問屋」の奥にありました。「本陣」というのは、街道の宿場の中にあり、参勤交代の大名（お殿様）が宿泊した特別な建物です。

玄関は「式台」とよばれる玄関で、お殿様はこの板のところから駕籠に乗り降りしました。

玄関の次に広間がありますが、ここからお殿様が休まれた奥の「上段の間」に入ることはできず、警備の家来が控えているところを通らないと行けないようになっています。

「上段の間」には書院づくりの床の間や、美しい彫刻なども施され、お殿様がお泊まりになるのにふさわしい部屋になっています。

8　小諸本陣問屋（江戸時代中期）

江戸時代、この通りは江戸へ通ずる北国街道で、この市町は「宿場」とよばれる旅館が集まった所でした。中でも「本陣」は、大名（殿様）が泊まる宿舎でした。殿様の泊まった「本陣主屋」は、江戸時代はこの奥にありましたが、今は駅の近くに移されています。

街道に面した「問屋」は、荷物の運搬を取り仕切る役所でした。となりの宿場から運ばれてきた荷物をここでいったん降ろし、小諸宿で用意した馬や人に振り分けて、次の宿場まで運ぶ手配をしました。つまり、荷物のリレーの基地だったのです。

問屋の店は、事務所として使われ、右側のひろばで荷物の積みおろしがされたようです。この問屋は、全国でもまれに見る立派な建物で、国の重要文化財に指定されています。問屋の建物の左に、立派な表門があります。殿様は、ここを通って中に入りました。

9　那須野整骨院（建物のとし 170 才くらい / 江戸後期の建物）

このお宅は、那須野さんが買う前は、明治時代には サ（かくさ）という屋号の繭問屋だったそうです。この建物は、街道沿いの細長い敷地をいかした住まい方をよく伝えています。街道沿いの家はみんな、通りに面して主屋、次に中庭、次に蔵というふうに並んでいます。

主屋の中は、道に面して店、奥に居間、そしてお座敷があります。お座敷からは、中庭の草木の緑が見えます。細長い敷地でも、日光や緑が取り入れられるように工夫されているのです。

横の空地から見える
那須野邸の奥の倉

10　山謙酒造（建物のとし 150 才くらい / 江戸末期）

江戸時代のおわりに、宿場の問屋として建てられたと伝えられる建物です。宿屋らしく、街道に面して格子窓が上下にあります。　小山家は、ここを明治 19 年ころ買い取り、明治 43 年から造り酒屋をはじめました。建物の裏には、裏町の通りを隔てて酒蔵が並んでいます。

この山謙酒造の建物は、切妻造のどっしりとした三角屋根で、てっぺんの千木がとてもかっこいい建物です。店に入ると、大きな土間があって、宿場の問屋場の姿が想像できます。通り土間の先、裏通りをはさんで格式ある門の中に、古い酒蔵が並んでいます。

11　粂屋･旧脇本陣　(建物のとし 200 才くらい / 江戸後期)

江戸時代、北国街道を通った大名行列が小諸宿に宿泊する時、お殿様は「本陣」に泊まり、家老など上級の家臣がこの「脇本陣」に泊まりました。また、２つの大名行列がいっしょになった時は、脇本陣に片方のお殿様が泊まることもありました。脇本陣は本陣の次に大きな建物で、建物の左側に格式を感じさせる「式台」の玄関があり、奥にはお座敷があります。また、２階の手すりや看板を下げる「まねき屋根」など、江戸時代の旅籠の姿をよく伝えています。

明治時代には一般の旅館となりましたが、小諸宿で一番の人気の旅籠であったそうです。中庭の奥に離れは、明治時代に上級の客用に増築したものです。

12　城代家老屋敷あと（鍋蓋城跡）

ここは、戦国時代のはじめ、1487 年に、大井伊賀守光忠により小諸のまちにはじめてつくられた城（鍋蓋城）の跡です。その後、小諸が武田氏の支配下になったときに、この鍋蓋城を取り込むように街道がつくられて、まわりの村から人々を移して「城下町」の原形ができました。同時に、小諸城の原形が今の懐古園の場所につくられました。

江戸時代には、この場所は小諸藩の城代家老の屋敷として使われました。城代家老とは、一番位の高い家臣で、お殿様が江戸にいる時にはその代わりに藩を仕切るお役人です。土を盛り石垣で固められた屋敷がまえは、それ自体が小諸城を守る「城郭」の役目をはたしていました。またこの屋敷を囲むように旧北国街道がつくられており、屋敷の石垣は町人地と武家地を隔てる仕切りの役目もしていました。

昔の写真／「江戸時代の小諸藩」より

13　江戸時代以前の北国街道（裏町）

今の市町の通りが、北国街道として定められたのは、戦国時代の終わり頃です。その前は、この裏町（市町公民館から仲町まで）が街道でした。人や馬の行き来が多くなり、ここでは狭いということで市町通りが開かれたそうです。この裏町はなかなか雰囲気のある道で、歩いていると道祖神や弁天様や寺などが見つかります。

14　養蓮寺・雷電のたもと鐘

養蓮寺は、戦国時代のはじめ（1493 年）にここに開かれた浄土真宗のお寺です。この寺の宝で、江戸時代の相撲のスーパースター雷電為右衛門が江戸から着物のたもとに入れて持ち帰ったという「たもと鐘」があります。

雷電は、江戸中期（1767 年）に大石村（現在は東御市）に生まれ、18 才の時には小諸の八幡神社の相撲大会に出ました。その時、身長 197ｃｍ、体重 183.7 ㎏の体で、それを見た人々に相撲取りになるようにすすめられ、江戸にのぼりました。その後、出世して雷電と言う名前で 16 年間、大関を張っていたそうです。

養蓮寺は雷電の生家の菩提寺で、大関への昇進を果たし江戸から里帰りする途中に立ち寄り、持ち帰った鐘を寄進したそうです。怪童といわれた少年期、雷電はこの養蓮寺で水汲みをしていたという言い伝えもあります。

15　馬場裏通り

この通りは、江戸時代は武家地内であり、「新馬場」という馬場（武士の乗馬の訓練場）がありました。本町との間の駐車場などにみられる石垣は、武家地と町人地の境の石垣です。
明治時代に、馬場裏の奥に住んでいた小説家・島崎藤村は、よくこの通りを通って、鹿島町にある揚羽屋に通ったということです。

「私は外出した序に時々立ち寄って焚火にあてて貰ふ家がある。鹿島神社の横手に、一ぜんめし、お休處、揚羽屋とした看板の出してあるのがそれだ。私が自分の家から、その一ぜんめし屋まで行く間には大分知った顔に逢ふ。馬場裏の往来に近く、南向きの日あたりの好い障子のところに男や女の弟子をして石菖蒲、萬年青などの青い葉に目を樂ませながらせっせと着物をこしらえる仕立屋がいる。すこし行くと、カステラや羊羹を店頭に並べて売る菓子屋の夫婦が居る。千曲川の方から投網を下げてよく帰ってくる髪の長い売卜者が居る。」（島崎藤村「千曲川のスケッチ」より）

16　大塚酒造の酒蔵資料館

塚酒造のお店は、本町に面しています。そこから奥に蔵が並び、馬場裏をはさんで酒造り工場の蔵があります。一番大きな蔵の２階が、「酒蔵資料館」になっていて、酒造りの道具やめずらしい盃などが見られます。
＊大塚酒造酒蔵資料館の案内
日曜祭日は休み、時間 8：30～5：00、入館無料（予約してからきてください）

17　結城神社

日本の古い家では、たいてい敷地の中に「屋敷神様」を持ち、家の守り神としてあがめ、供え物等をして大切にしています。
この大塚家では、本町にあった屋敷神様を大正８年４月にこの地に移築し、祖先の出身地が茨城県の結城であったので「結城神社」として祭りました。
酒造りをしているので、酒の神様である「松尾の神様」もここにいっしょに祭ってあります。
このケヤキの木は樹齢300 年以上のものなので、江戸時代中期、ここがまだ武家地だった頃からここに立っていたということになります。

18　藤村の井戸

明治32 年から小諸に暮らした島崎藤村夫妻が、毎日、水を汲みに来た井戸です。その頃は、ロープと桶で水を汲み上げるつるべ井戸だったそうです。

「信州の小諸で暮らした７年間のことを考えてみても、先ず自分の胸に浮かんで来るのは、あの小諸の住居の近くにあった井戸端です。」と、島崎藤村は書いています。

お嬢さん育ちであった冬子夫人が、てぬぐいを頭にかぶって着物をしりっぱしょりして、つるべ井戸から水を手桶けに水を汲んで、桶をさげて持ち帰る姿を、近所の人は毎日見ていました。冬子さんも、近所の人との井戸端会議の輪にはいっていたということです。

「夜の九時過に、馬場裏の提灯はまだ宵の口のやうに光った。組合の人達は、仕立屋や質屋の前あたりに集まって涼みがてら祭の噂をした。此の夜は星の姿を見ることが出来なかった。螢は暗い流れの方から迷ってきて、町中を飛んで、青い美しい光を放った。」（島崎藤村「千曲川のスケッチ」より）

19　「島崎藤村」が住んでいたところ

小諸にいた７年間、藤村はこの奥の小さな家に家族と暮らしていました。藤村が住んでいた建物は今はなく、佐久市の貞祥寺に移築されています。藤村は自分の住まいのことを、次のように書いています。

「わたしの馬場裏に借りた家は、古い士族屋敷の跡、二棟続いた草茸屋根の平家で、壁一枚へだてて近在の小学校へ通う校長の家族が住んでいた。　付近には質屋や仕立屋などがあり、家の裏側の細い水の流れをへだてて水車小屋の見えるようなところだったが、小諸本町には近く、しかも割合に閑静な位置ではあった。」（「雲」より）

家賃は３円、月給ははじめ３０円ぐらいであったそうです。その家のつづきの畑を借りて野菜を作り、簡素な生活をおくっていたようです。藤村の家があった場所の入口には、作家・有島生馬の字で「藤村舊栖地」の碑が建てられています。

「島崎藤村」と「小諸義塾」

島崎藤村は、明治時代に日本の自然主義文学を完成させた詩人であり小説家です。木曽に生まれ東京の大学を出ましたが、明治 32 年に、旧師・木村熊二の招きで、「小諸義塾」に英語・国語教師として赴任しました。この年、冬子と結婚。翌年は長女 緑が生まれました。明治 38 年に小諸義塾を辞めるまで、7 年間を小諸で過ごしました。小諸にいる間に書きためた散文「千曲川のスケッチ」には、この地方の美しい風景や素朴な人々とのふれあいが描かれ、ここでつくられた「小諸旅情の詩」は日本中で愛され、全国に小諸の地名を広めました。この学校は、明治 26 年に木村熊二という人が開いた学校です。木村熊二は、明治 2 年にアメリカに留学し、様々な学問を身につけ、帰国後はキリスト教の伝導をおこなっていました。その後、木村が佐久に来た時、小諸にも小学校以上の学校が必要であると考えていた小諸の青年・小山太郎が、小諸に学校をつくってくれるように木村に頼みました。木村はその前に明治学院で教師をしており、その時の教え子に島崎藤村がいました。他にもすばらしい教師を東京から呼び寄せ、生徒54 名に先生 7 名で授業をしておりました。

小諸義塾は、明治 39 年まで 13 年間続き、藤村はここで 7 年間、英語と国語を教えました。

授業の中で、仏陀の生涯を語ったり、小説家として生きようとする自分自身の決意を語ったりしたそうです。

20　御用水跡の道

この道は、江戸時代には、幅 50ｃｍくらいの石積み水路があり、飲み水にもなるようなきれいな水が流れていました。その水路は、小諸城（懐古園）に通じ、城の飲み水になっていたので「御用水」と呼ばれていました。御用水ぞいには細い道があり、水役人が 24 時間、いったりきたりして水が汚されないかを監視していたそうです。まちの人（ここは武家地なので武士の家族）は、汚さないように汲みあげて使っていました。御用水は、城下町の中に何本か流れており、ひとつが使えなくても他が使えるようにしてあったそうです。